

建国初期ユーゴスラヴィアにおけるカトリック教会のクロアチア民族主義に対する姿勢の変遷

磯村 尚弘

はじめに

9世紀の、クロアチアでのローマ教会によるキリスト教の布教以来、キリスト教（宗教改革以降はローマ・カトリック教会、以下「カトリック教会」と表記）がクロアチアに与えた影響は非常に大きかった¹。例えば、クロアチア民族主義運動の先駆けである、1830年代から始まった民族再生運動（「イリュリア運動」）では、多くのカトリック聖職者がこの運動に参加し、それ以降、カトリック教会や聖職者はクロアチア民族主義運動に積極的に関わっていった。

しかし、カトリック教会は、一方で常に過激な民族主義的活動や主張を行い、かつそれを支持しつづけたというイメージが根強くある。例えば、1990年に勃発したユーゴスラヴィア内戦では、カトリック教会が、過激な民族主義を主張していたトゥジマン（Franjo Tudman）率いる政党クロアチア民主同盟（HDZ）を支持するなど、偏狭な民族主義の原因と見られることも多い²。しかしカトリック教会や聖職者のクロアチア民族主義というのは、あくまでカトリック教会が許容でき、教会として存続できる範囲でのものであり、クロアチア民族主義に対する態度は国家との関係に応じて柔軟に変化しているのである。

ところで、これまでクロアチアにおけるカトリック教会の活動については、数多くの研究がなされてきた。しかしそれらの多くが、第二次大戦後1945年に建国されたユーゴスラヴィア連邦人民共和国（1963年にユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国と改称、以下「ユーゴスラヴィア」と表記）の宗教政策と、カトリック教会を含む各宗教勢力によるユーゴスラヴィア政府の宗教政策への対応を分析したものである。例えば Pedro Ramet（1985）はカトリック教会およびユーゴスラヴィア政府の内部に存在した派閥に着目して、それ

までの先行研究がその派閥の活動を軽視しているか、どちらか一方の派閥の活動のみをとりあげて分析していると批判して、双方の派閥の活動を中心においた、両者間の関係について分析を行っている。Perica (2002) もユーゴスラヴィア政府と、ユーゴスラヴィアで主要な宗教であったカトリック教会、セルビア正教会、イスラム教との関係を、政府の宗教政策とそれに対する各宗教勢力の対応という視点から分析、考察している。しかし各先行研究とも政府による政策決定の過程やカトリック教会の対応の経緯の分析に研究の中心が置かれ、カトリック教会のクロアチア民族主義への姿勢の変遷については軽視しているように思われる。

そこで本稿では、カトリック教会の民族主義に対する姿勢の変遷が顕著に現れていると思われる、1941年の「クロアチア独立国 (NDH)」の建国から、ザグレブ大司教でありクロアチアにおけるカトリック教会の中心的存在であったステピナツ (Alojzije Stepinac) に対する裁判および、バチカンとの国交交渉が始まる 1960年代初期までの時期を対象として、カトリック教会のクロアチア民族主義に対する姿勢の変遷について考察したい。

1. 第二次大戦中のカトリックの活動

1941年4月6日にドイツがユーゴスラヴィア王国に侵攻し、王国は枢軸国側に分割占領された。その際クロアチアでは同年4月10日にドイツの傀儡国家である NDH の建国が宣言され、過激な民族主義を主張し、主にイタリアで活動していた民族主義団体ウスタシャの党首パヴェリッチ (Ante Pavelić) が、国家元首であるポグラヴニク (指導者) に就いた。この、ドイツ軍の侵攻によるユーゴスラヴィア王国崩壊及び NDH の建国をカトリック教会は歓迎した。当時ザグレブ大司教でありクロアチアにおけるカトリック教会の中心的存在であったステピナツは、この侵攻を「神の偉大なる偉業」(Radić 2003: 203) と賛美し歓迎した。そしてクロアチア独立国の建国を「クロアチア民族にとって非常に重要な出来事」(Radić 2003: 203) と述べたのである。彼はユーゴスラヴィア王国軍がドイツ軍に降伏する前の 1941年4月17日にはもうこのウスタシャの代表のもとを訪れていた。

ところで、このステピナツの行動は、クロアチア民族主義の観点からクロアチアの独立を祝福するためだけに行われただけではなく、同時に独立によって教会の自治権が復活することを期待していたのである。そもそもユー

ゴ王国建国によってカトリック教会は、1918年以前に享受していた、オーストリア＝ハンガリー帝国内での主要な宗教という優位な立場を失っており、さらに王国は建国当初から憲法に政教分離の原則を反映させるなど政教分離政策を進めていた。カトリック教会は当初オーストリア＝ハンガリー帝国時代よりも自治権が拡大すると考え、ユーゴ王国建設を熱心に支持していたので、こうした政策が進むにつれ、政府に対する失望と反発が広がった。また、ユーゴ王国はセルビア人の国王によるセルビア人優位の中央集権体制であったため、クロアチア人によるユーゴ王国への反発は建国当初から強く、民族主義団体や政党による、クロアチア独立を主張する活動が活発に行われていたのである。また1935年にバチカンとの間でコンコルダートが締結され、1937年には議会で批准されたものの、セルビア正教会およびセルビア人の激しい抗議行動にあって1939年に撤回してしまった。コンコルダートの締結でバチカンとの関係を強化することで、国内での自治権を確保しようとしたカトリック教会は、この撤回に激しく反発し、クロアチア民族主義運動と同調するようになったのである。カトリック教会がNDHの建国を歓迎した背景にはこうした事情が働いていたと思われるが、バチカンはNDHに対し国家としての承認を避けるなど慎重な対応とり、非公式の使節をNDHに派遣したのみであった。

NDHは建国後すぐにNDH国内に居住するセルビア人に対する迫害を始めた。6月にはNDHの教育大臣であったブダク（Mile Budak）が、国内に居住するセルビア人約200万人の3分の1を国外追放、3分の1を殺害、そして残り3分の1をカトリック教会に強制改宗させると語っている（Alexander 1979:22）。実際に41年6月にはドイツ占領下のセルビアに作られた強制収容所へ国内のセルビア人が移送され始め、またヤセノヴァツなど国内に多くの強制収容所が建設され、セルビア人、ユダヤ人、ロマなどが殺害された。しかしそのとき殺害された被害者の正確な数については現在も明らかになっていない³。

この他にもNDHは主にセルビア人に対しカトリック教会に強制改宗させる政策を建国直後から実施しており、カトリック教会の聖職者はこの強制改宗に協力したとされる⁴。しかしカトリック教会の聖職者は、NDH及びウスタシャのメンバーによる、カトリック教会への改宗を拒否したセルビア人に対する暴行や虐殺などの光景を目にして、セルビア人への蛮行の凄まじさに

次第に気づき、NDHやウスタシャと距離をおくようになり、一部の聖職者は教会組織から離反してパルチザンに参加するようになった。また当初ウスタシャやNDHの政策を支持していたはずのステピナツも、彼らの蛮行に対し、それを戒める発言や態度をとったとされるが (Alexander 1979: 34-36)、明確に彼らに対して反対の立場をとったわけではなく、この「曖昧さ」が原因で第二次大戦後の社会主義政権はカトリック教会に疑念と反感を抱いたのであり、その後の両者の関係に重大な影響を及ぼすことになる。

2. 建国後の政府とカトリック教会の関係

第二次大戦直後は、政府側のカトリック教会への厳しい統制が続けられた時期であった。政府はバチカンという、いわば外部からの影響力を排除するために、クロアチアのカトリック教会をバチカンと分離させてクロアチア人の民族教会とさせることを目的とし、カトリック教会に干渉し統制を行った。しかし究極の目的は、共産主義のもとで各民族を「団結」させ、ユーゴスラヴィアを一つの共産主義体制として「統一」することにあった。そのためには民族主義が大きな障害だったのである。例えばチトーは、各民族の権利を認め平等を保障する一方、民族主義は基本的には官僚主義ともろもろの支配欲の表現であると批判し、各民族を民族の枠の中に閉じ込めることなく交流させて「汎ユーゴスラヴィア文化」を発展させることがユーゴスラヴィアの全般的な利益につながると主張している (Tito 1974: 115-116)。それに対しカトリック教会は、教会運営に政府が介入するのを阻止し、また伝統的な反共産主義的な立場を保持する為に、Marija Bistrica⁵への巡礼という、クロアチア民族主義的色彩の濃い宗教行事を行うことで信者の結束力を固め、政府に対抗する姿勢を示したのである。

1945年5月6日のドイツ降伏後、チトー率いるパルチザンが5月8日にザグレブに入った。カトリック教会はパルチザンに参加した聖職者を加えた使節団をチトーのもとに派遣し、新政権に協力する意思があること、そしてカトリック教会は組織を有して活動する権利があり、自らのもとで宗教教育を継続させたいという希望をチトーに伝えた。彼らの要求に対し、チトーは一部のカトリック教会の聖職者のNDH時代の行動に対する不満を述べ、かつて南スラブに居住するスラブ民族の連帯を唱えたシュトロスマイエル大司教の偉業に目を向けるべきであると主張し、その上で、チトーは自らの考え

る国家と教会との関係について使節団に述べた。それは、クロアチアのカトリック教会をバチカンと分離させ、独立した民族教会にするというものであった (Alexander 1979: 57-58)。彼は、カトリック教会を通じてのバチカンからの干渉を避けようとしたのである。

これに対し、教会側の使節団は、NDHはバチカンから一度も承認を受けていないことを指摘し、クロアチアのカトリック教会は教義面に関してのみバチカンからの指示を受けており、その他の活動については基本的に自由であることを主張した。そしてクロアチア独立を望んでいたがゆえにNDHを支持したが、彼らの他民族への蛮行を知ると、彼らへの支持をやめ、その行為をいさめる役割を果たしていたことも述べた。翌々日にはステピナツ自身がチトーと会談したが、彼はそこで、バチカンのみが教会組織に関する最終的な決定ができ、司教は個人としての意見を述べることしかできないと再度主張した。そして彼はバチカンとのコンコルダト締結について、締結は理想的な解決方法だと述べ、戦前のチェコスロヴァキアのケースのようにまず暫定的な協定という形をとるのが望ましいと述べた⁶。

こうした交渉が行われている一方、第二次大戦中に NDH に協力したとして、また戦後 NDH のメンバーの逃亡を助けたとして多くの人が戦犯として軍事法廷で処罰、処刑されたが、その中に多くのカトリック教会を含む各宗教の聖職者も含まれていた。また軍事法廷にさえかけられることなく処刑された聖職者も数多く存在した。ただ、この間に何人殺害されたかについては現在も明確ではない。また中等教育における宗教教育が禁止されたり、婚姻に関して教会が行っていた儀式や契約を行政が行うなど、その活動にも制限が加えられた。また教会所有の土地や施設が政府に強制的に接収された。この政府の対応にカトリック教会は反発して大きな論争となった。こうした統制が続く中で、1945年7月8日に Marija Bistrica の巡礼が行われ、これに4～5万人の信者が参加した。そしてその中には多くの戦犯として処刑されたり逮捕された人の家族が含まれていたために政府を一層刺激した。さらにステピナツはチトーの側近であったバカリチ (Vladimir Bakarić) に対して政府の対カトリック教会政策を厳しく非難する書簡を送っている。

一方、政府は1945年8月21日にクロアチア宗教委員会を設立し、委員長にかつてザグレブの教区司祭でパルチザンに参加したリッティグ (Svetozar Rittig) が就任した。彼はかつてシュトロスマイエル大司教の秘書を勤めたこ

ともある人物である。彼は共産主義に同調してパルチザンになったのではなく、聖職者の立場から南スラブの連帯思想に共感し、また愛国的立場から同調して参加した。彼は教会の存在を脅かす積りはなく、ユーゴスラヴィア共産党（52年に「ユーゴスラヴィア共産主義者同盟」に改称）や政府が教会を迫害していないこと、聖職者への逮捕、処刑については聖職者だからではなく個人の犯した犯罪のために処罰を受けていること、そして政府は教会の活動に介入してはいないと強調し、そのうえで、カトリック教会に対しこの委員会のもとで活動するよう要請した。

しかしこの委員会に対する教会側の反発は強く、45年9月17日から22日まで行われた司教会議とそこで行われた決議によって、政府に対する敵対的態度を明確に示した。この決議は回状として各教区に送られたほか、書簡としてチトーにも送られた。この回状は、新しい政府と最初に接したときから、教会は現在顕著になっている問題を相互の合意の下に解決することを政府に望んできたが、それが徐々に幻滅に変わってきたことをまず主張した後に、政府によるカトリック教会の聖職者の処刑、逮捕などが行われ、また宗教教育が禁止され、教会の施設が接収されて教会の活動を妨害していることを非難した。そしてわずかながらもカトリック教徒が大戦中にNDHの蛮行に協力していたことを認めつつも、その責任を教会全体に求めるのは間違っていると主張した。最後に、浅薄な無神論や共産主義思想の為にクロアチア人の道徳が危機に晒されていることを指摘して、多くの人々によるMarija Bistricaへの巡礼と言う形でカトリック教会への信仰があらわれていることを喜ぶべきことと述べている。この回状にはステピナッツ以下17人の司教が署名した（Alexander 1979: 69-73）。この決議に対し政府は態度を更に硬化させ、これに反論する論評を各新聞に掲載した。またパルチザンに参加した聖職者たちはこの決議に抗議し、回状を読むことを拒否したりしている。チトーも1946年7月13日に行った演説の中で、戦争中に我々を裏切りパヴェリッチやステピナッツに協力することを拒否しなかった者に対し怒りをぶつけるべきだという内容の演説を行っている（Tito 1979: 106）。このような状況の中、ステピナッツと教会に対する攻撃は激しくなり、事態はステピナッツ訴追へと進むことになる。

3 . ステピナッツ裁判

ステピナッツに対する裁判は 1946 年 9 月 30 日より行われた。この裁判では、ステピナッツは大戦中に NDH に協力してセルビア人への強制改宗や大量虐殺に関与した罪で訴追されている。しかし訴追された真の理由は、彼の政府への敵対的行為にあったと推察される。Ramet によれば当時チトーの側近でありユーゴスラヴィア共産党の幹部でもあったジラス (Milovan Djilas) は、ステピナッツ裁判の後に、ステピナッツが訴追されたのは第二次大戦中の行為によってではなく、ユーゴスラヴィア政府に敵対したためであると私的な会話の中で発言しているし、検察官として裁判に関わったブラジェビッチ (Jakov Blažević) は、1985 年に雑誌のインタビューに応じて、ジラスと同様にステピナッツの政府に対する敵対的行為が訴追を招き、チトーの提案どおりバチカンとのつながりを断って民族教会となることを容認していれば、訴追されなかっただろうと述べているからである (Ramet 1992: 87)。

ステピナッツは裁判の 10 日前の 9 月 18 日に逮捕され、NDH の警察長官でセルビア人などの大量虐殺に関与し、またパヴェリッチらと共謀して反政府勢力を組織したとされて訴追されたリサク (Erih Lisak)、そしてステピナッツの秘書を務めリサクを教会施設内に匿いステピナッツと面会させたとして訴追されたシャリチ (Ivan Šalić) とともに審理された。ステピナッツへの訴追理由は 9 項目に及ぶが、(Embassy of the Federal Peoples Republic of Yugoslavia 1947: 87-95)、それらは、第二次大戦中におけるセルビア人への迫害や NDH への協力に関するものであった。ステピナッツはこの告発に対し、無罪を主張したが、自分自身による釈明は行わなかった。判事は、ステピナッツがクロアチアのカトリック教会の指導的立場にあったことから、教会とカトリック系諸団体が行った行為についての責任はすべて彼にあると主張し、その証拠として多くの NDH やファシズム支持の内容のカトリック系出版物が挙げられた。これに対しステピナッツは、裁判長や検察官の告発や自身の責任に関する質問や追及に対してほとんど黙秘し、時折発言しても、その責任や告発内容を否定し無罪を主張するのみであった (Alexander 1987a: 153-155)。例えばセルビア人のカトリック教会への強制改宗については、教会の関与を強く否定したが、彼の発言は取り入れられることも無く 10 月 11 日に判決が下され、ステピナッツは有罪で 16 年の強制労働の刑が言い渡された。1960 年に彼は亡くなるのであるが、その後彼は殉教者として扱われクロ

アチア民族主義のシンボリック的存在となる。

4．裁判後の状況

ステピナッツに対する裁判の経過は欧米各国で詳しく報道された⁷。例えばキリスト教系の雑誌*Eastern Churches Quarterly* は、ユーゴスラヴィア国外のカトリックの聖職者がステピナッツの逮捕、訴追に対し激しい抗議をしている模様を伝えている⁸。政府は自らの行った裁判の正当性をアピールするため数多くの冊子をつくり、自らの立場をアピールし続けた。また聖職者の逮捕、訴追も裁判後も数多く行われた。また神学校も閉鎖されたままであった。1952年には、秘密警察長官であったランコヴィッチ（Aleksander Ranković）が演説の中で彼らに対する非合法的逮捕や訴追がいままで行われていたことを認め、これからも継続すると述べている（Alexander 1979: 135）。

その一方で政府は聖職者に聖職者協会を設立させた。これは労働組合と同等のものとされ、政府が、教会にたいする補助金やその他の支援を行う際に聖職者が政府と交渉を行う組織とされた。この組織や組織を通じて行われる支援によって、カトリック教会を政府側に取り込むことをねらい、1948年にイストリアのカトリック教会の聖職者協会が設立され、1949年にはスロヴェニアでも設立された。イストリアやスロヴェニアではカトリック教会の聖職者と政府との関係が比較的良好であったため、この協会の運営は比較的順調に行われた。しかし、クロアチアでは1953年に同様の協会が設立されたものの、この協会への協力を拒否する聖職者が相次ぎ、一部の司教やバチカンはこの協会への参加を拒否するよう呼びかけていた。この協会をめぐる、司教団と政府が交渉を行ったがいずれも決裂した。こうした状況がつづくなかでバチカンとの国交回復をめぐる交渉が始まるのである。

5．結論

以上述べてきたように、カトリック教会は、第一次大戦後建国されたユーゴスラヴィア王国では、それまで享受していたオーストリア＝ハンガリー帝国での主要な宗教という立場を失って不利な立場に置かれたために、当時セルビア人優位の支配体制に反発していたクロアチア民族主義団体や政党の活動に同調して、クロアチア民族主義を前面に押し出した活動を展開した。そしてユーゴ王国崩壊後成立したNDH政権下では、NDHの民族主義的な政策

に協力してセルビア人のカトリック教会への改宗強制に関与したが、NDHのセルビア人やユダヤ人などへのすさまじい迫害に対ししだいに距離をとるようになり、その協力も消極的なものになっていった。第二次大戦後のユーゴスラヴィア政府は、共産主義のもとでユーゴスラヴィア内の各民族を「団結」させ、ユーゴスラヴィアを一つの共産主義体制として「統一」させるため、その「団結」や「統一」の障害とみられたカトリック教会に対し、バチカンとの関係を絶つよう要求し、その活動の制限や資産の接収、聖職者の逮捕、処刑を行った。これに対してカトリック教会は反発し、信者の結束を図るために、クロアチア民族主義的色彩の濃い宗教行事を積極的に展開した。そのため政府との関係は悪化し、ステピナツへの裁判、投獄という事態に至ったのである。そしてステピナツ裁判後も聖職者教会を設置するなどしてカトリック教会の活動に統制を加えつづけたのである。

このように、第二次大戦をはさんだ時期のカトリック教会と民族主義の結びつきは、当時の政権や政治体制との関係に強く影響されたものであるという共通点はあるが、戦前及び戦後の結びつきが他民族との対立が原因であるのに対し、戦後の共産主義政権下でのカトリック教会の民族主義は、その背景にユーゴスラヴィアとバチカンとの関係がかなり大きく影響していると思われる。事実、カトリック教会とユーゴスラヴィア政府との関係は、1966年のバチカンとの国交回復以降改善されるからである。そしてこの国交回復以降カトリック教会の活動に対する制限が緩和され、教会の建設、独自の新聞の発行、学校の設定などが認められるようになった。また政府からのカトリック教会を含む各宗教団体への補助金交付といった支援がされるようになったのである。それには宗教団体を政権側に取り込む狙いがあった。そしてこうした政府の方針により、教会は政府との対立を回避するようになった。例えば、1971年に「クロアチアの春」と呼ばれるクロアチア民族主義を掲げた反政府運動が起きた際には、多くの知識人、学生そして一部の聖職者が参加したが、カトリック教会の司教団はこの運動に関与せず事態を静観しつづけたのである。ところがその一方で、カトリック教会はクロアチア国内での聖地巡礼など、民族主義的色彩の濃い宗教活動を展開しつづけた。

1980年代後半になると、ユーゴスラヴィアの状況は悪化し、スロヴェニア、クロアチアで独立を志向する動きが本格化するようになる。これと同時期の教会は、今までの政治的活動から一定の距離をおく姿勢を捨ててだんだん政

治に影響を及ぼすようになっていった。例えばトウジマン率いる過激な民族主義を掲げた HDZ を多くの聖職者や信徒が支持し、トウジマンも教会の協力を得て、海外在住のクロアチア人より資金援助を得ていった。その結果 1990 年の選挙で HDZ は 43 パーセントの票を獲得して勝利した。この選挙においても教会の支援が多く行われたという。こうして HDZ が政権を握り、1991 年の独立宣言を行うことになるのである。

注

- 1 1981 年に行われた調査によれば、ユーゴスラヴィア国内には 680 万人のカトリック教徒がいて、これはユーゴスラヴィア全人口の 31% を占めた (Pedro Ramet 1985: 300)。司教区が主にクロアチア、スロヴェニアに置かれていたことを考えると、680 万人の信徒の大部分がクロアチア、スロヴェニアに居住していたと考えられる。また、現在では、政府のホームページにクロアチアの主要な宗教としてカトリック教会が挙げられているが、その全人口に占める割合については言及されていない (<http://www.vlada.hr/default.asp?ru=199&sid=&jezik=2>) (2005 年 11 月 23 日アクセス)。クロアチア国内にはカトリック教会以外にもセルビア正教会などがあるが、セルビア正教会信徒は「セルビア人」として、クロアチア国内に居住する少数民族として扱われている。このことから、「クロアチアに居住してクロアチア語を話すカトリック教徒」を(クロアチア国内に居住する)クロアチア人とすると、Castellan et al.によれば、1991 年現在でクロアチアの全人口の約 80% がクロアチア人であることから (Castellan and Vidan 2000:13-14)、クロアチアの全人口の訳 80 パーセントがカトリック教会の信徒ということになる。
- 2 このようなイメージが下敷きとなって書かれた文献、特にルポルタージュは多いが、例えば Kaplan (Kaplan 1996) を参照。
- 3 Rusinow は、ユーゴスラヴィアで 1941 年から 45 年にかけて 170 万人が殺害されたとしており、これは第二次大戦前の全人口の 11 パーセントに当たると述べている。(Rusinow 1977: 19)
- 4 1947 年にステピナツに対する裁判の正当性をアピールするために駐米ユーゴスラヴィア大使館が作成した小冊子 *The Case of Archbishop Stepinac* は、ステピナツを中心としたクロアチアのカトリック教会が NDH の政策を全面的に支援していたことを、当時のカトリック団体が発行していた新聞や雑誌の記事や没収した書類、報告書、そして多くの証人の証言をもとに主張しているが、その中で強制改宗についてもふれられている。それによると、この強制改宗は NDH が推し進めたクロアチア内に存在する外的要素の排除政策の一つであり、1941 年の 11 月 27 日にステピナツはザグレブで司教会議を招集し、教会としてこの政策を認める決定を下していた。そしてステピナツが 1944 年 5 月 18 日にローマ教皇に送った報告書の中で、強制改宗させたセルビア人の数を 24 万人と報

告していると指摘している (Embassy of the Federal Peoples Republic of Yugoslavia 1947: 59)。クロアチアにおけるカトリック司教団体である Hrvatska Biskupska Konferencija は、クロアチアにおけるカトリックの歴史 (Katolička Crkva u Hrvata) を自らのホームページの中で掲載しているが、カトリックがこの殺害に関与した件についてはその中では具体的に言及しておらず、むしろカトリックの聖職者や信者の多数が殺害されたと主張している。

(http://www.hbk.hr/novi/hbk/crkva.php?lnk=crkva_u_hrvata) (2005/09/21 アクセス)
5 Marija Bistrica とは、クロアチアの Zagorje 地方の南東に 13 世紀から存在するマリア信仰の聖地であり、毎年約 80 万人の信者が巡礼で訪れるとされる。1650 年にはマリア像がクロアチア人にオスマントルコ帝国の侵略を知らせるために移動した、といった「奇跡」が伝えられるなど、民族主義的観点からクロアチア人にとって非常に重要な位置を占める。1998 年 10 月には当時ローマ法王であったヨハネ・パウロ 2 世が Marija Bistrica を訪れ、ステピナツに祝福を授けた。

(<http://www.marija-bistrica.hr>) (2005/09/21 アクセス)

6 第二次大戦前のチェコスロヴァキアはカトリックが多数を占めていたが、共和国政府自体は反強権的であり、1925 年のヤン・フス記念大祭をきっかけにして共和国政府とバチカンとの関係は悪化した。これによって正式なコンコルダートの締結は不可能となり、交渉の末 1926 年に暫定的な協約が結ばれた (Bonnoure 1976 : 111-112)。

7 New York Times, 20 September 1946, p.9.及び Times, 19 September 1946, p.3. 参照
8 “News and Comments” Eastern Churches Quarterly, Vol.6, No.8, 1946, p.504-505.参照。なおここではスコットランドのカトリック司教の非難が掲載されている。

参考文献

- Alexander, Stella.1979. *Church and State in Yugoslavia since 1945*.Cambridge: Cambridge University Press.
---1987a.*The Triple Myth: A Life of Archbishop Alojzije Stepinac*. New York: Columbia University Press.
---et al.1987b.*Catholics, the State, and the European Radical Right, 1919-1945*. New York: Columbia University Press.
Bonnoure, Pierre.1968. *Histoire de la Tcheoslovaquie*. Paris : Presses Universitaires de France. (山本俊朗訳、1976 年、『チェコスロヴァキア史』、白水社。)
Castellan, Georges and Vidan , Gabrijera.1998. *La Croatie*. Paris: Presses Universitaires de France. (千田善、湧口清隆訳、2000 年、『クロアチア』、白水社。)
Cuvalo, Ante.1990. *The Croatian National Movement, 1966-1972*. New York : Columbia University Press
Embassy of the Federal Peoples Republic of Yugoslavia. 1947. *The Case of Archbishop Stepinac*. Poslanstvo.
Kardelj, Edvard.1975. *The Nation and International Relations*. Beograd:STP. (高屋定國、

- 定形衛訳、1986年、『民族と国際関係の理論』、ミネルヴァ書房)
- Kaplan, Robert.D. 1994. *Balkan Ghosts:A Journey Through History*. New York : Vintage Books. (宮島直機、門田美鈴訳、1996年、『バルカンの亡霊たち』、NTT出版)
- Matković, Hrvoje. 2002. *Povijest Nezavisne Države Hrvatske*. Zagreb: Naklada Pavičić.
- .2003. *Povijest Jugoslavije*. Zagreb: Naklada Pavičić.
- Muzić, Ivan.2003. *Katolička Crkva, Stepnac i Pavelić*. Split : Marjan Tisak.
- . 2003. *Katolička Crkva i Stepnac*. Split: Marijan Tisak.
- Pavlowitch, Stevan K.1988. *The Improbable Survivor: Yugoslavia and its Problems 1918-1988*. London: C.Hurst&Co,
- Perica, Vjekoslav.2002. *Balkan Idols: Religion and Nationalism in Yugoslav States*. New York: Oxford University Press.
- Radić, Radmila.2003. *Religion in a Multinational State: The Case of Yugoslavia*. Ed. Djokić, Dejan. *Yugoslavism: Histories of a Failed idea*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Ramet, Pedro. 1985.“Factionalism in Church-State Interaction: The Croatian Catholic Church in the 1980s.” *Slavic Review*, 44, no.2: 298-315.
- Ramet, Sabrina P.1985. *Religion and Nationalism in Soviet and EastEuropean politics*. Durham : Duke University Press, 1989.
- .1990.Catholicism and Politics in Communist Societies. Durham, N.C. : Duke University Press,
- . 1992. *Balkan Babel : Politics, Culture, and Religion in Yugoslavia*.Boulder Colo: Westview Press.
- Rusinow, D.1977.*The Yugoslav Experiment 1948-1974*. London: C.Hurst&Co,
- Tito, Yosip B. 1979. *Govor na Cetnju na Dan Ustanka u Crnoj Gori*.Ed.Dedijer , Vladimir. *Dokumenti1948*.3vols.Beograd :Rad, Vol 1.
- . 1979. 島田浩訳、『非同盟社会主義の歩み ヨシブ・ブロズ・チトー』、恒文社。
- 小山洋司、1996年、『ユーゴ自主管理社会主義の研究－1974年憲法体制の動態』、多賀出版。